明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十七年三月二十七日印刷納本
昭和十七年四月一日發行（毎月一回一日發行）
第五百六十五號

目次

三教の特色と其調和（完結）……本多日生
世法と佛法……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（十）……河合陟明
天台大師の實踐哲學……磔川鷄山
優婆塞戒經要解（其六）……本多日生
記事
○本部團報　○福島教信　○產報會記　○入帳報告

第四十七年　四月號

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　**研學ノ闡達**　**活動ノ旺盛**

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に願望スル所ナリ

本團畧則

□**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

□**維持員**　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

□**贊助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

□**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルル方ヲ正團員トス

□**入團**　御希望ノ方ハ住所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ送布ス

□**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

三教の特色と其調和（完結）

本多日生

四、佛教の特色

に就て申上げようと思ふ。これも非常に結構なものでありまして、一つには

（イ）**哲學眞理**　を佛教は有して居る。儒教も神ながらの教も今まで言つた所で非常な立派なものだけれども、哲學的に研究する時分に根柢が薄弱である。儒教のいふ天道といふものは獨斷的である。基礎がない、唯いきなり天道とは何ぞやといふ、何ぞやとは困つたものである、『天道とは日月を謂ふに非ず、蒼蒼の天を謂ふに非ず』蒼い天とも違ふ、お日樣とも違ふ、それから先まで行くのに大變である。さうして最後は曰く言ひ難しといふ所で逃げて居る、そこが儒教の淺薄なる所である。今後の思想界はそんなことで行けるものでない、總てさういふ神樣のことでも魂のことでも、深い深い宇宙の絶對の問題に這入ると、佛教の哲學の眞理があつて玆に日本の文明を完成する、これ微かつせば總て假定的のものである。今後本當に思想を研究する者は、さうすれば都合が宜いけれども、そ

こまで行くには土臺が出來て居らぬ。斯ういふことで皆覆へされる。そこで必ず日本の建國を言つたならば、それは哲學的の根據はどうである、天道は哲學的の根據はどうであるといふことになる。そこで佛教といふものが哲學の眞理を供給して、宇宙の成立でも、神や佛のことでも精神のことでも、何でも難解の問題を悉く解決を與へるのである。更に佛教は

（ロ）**宗教の完備**　といふ點に於て最も優れて居る。人間宗教なかるべからざるものだが、それに就ても大事な事柄がすつかり整頓して居る。信心の心得、其教、信仰の相手となるべきもの、實際宗教に就て必要な所の事柄を悉く揃へて、さうして如何なる者でも皆宗教の信仰に歸せしむるだけの教化力を持つて居る、それが實に大事なことである。神ながらの教や、儒教などを以て彼此れ言ふべきものではない。宗教の問題になれば無論東洋に於ては佛教の獨壇場である、世界的にも佛教は最も完備したる宗教として見なければならぬ。是と對抗するものはキリスト教や、マホメット教、バラモン教だけれどもこれは佛教に及ぶべきものぢやなからうと思ふ。そこに佛教の尊い所がある、佛教は實に能く完備した宗教である。これが能く分ればさういふやうなものであるかといふ所で、どうしても反對することは出來ない、それを反對して行かうといふ奴はド盲である。盲と聾といふものは何にもならぬ。眼が明いて居る以上は日本人佛教を悔るなどといふことは出來るものでない、餘程馬鹿にならなければ佛教を離れることは出來ない、私は賢いけれども悔るといふ、さういふ奴は馬鹿に疋を掛けた奴である。逆も賢くて佛教を馬鹿にするといふことは出來るものでない、賢哲の士必らずや我が教に來らんと、お釈迦様は言つて居る。賢哲の士にして釈迦の教に這入つて合掌しないやうな者は決してあるべきものぢやない。それから尚ほ佛教は

（八）**倫理の根柢と實行力**　といふものを持つて居る、倫理其ものに就ても佛教は報恩主義を立てて立派なものを持つて居るし、其外德目も完備して居るけれども、假に暫くさういふ長所は取除いて置いても佛教によつて此倫理の根柢といふものが築かれる。倫理がどういふ所から起きるといふ其心の道、宇宙の本源に就て、即ち哲學を持つて居るが爲に、倫理哲學としての根柢を示し、而して其實行力を保障して行く、これは宗教性であるが故にさうなる。前の二つ哲學の眞理と宗教の完備を持つものは自ら其の根柢に基く倫理を有する譯である。そこで道德問題に就ても悔ることは出來ない、道德のことは儒教さへあれば宜しいといふのは薄馬鹿である、どうしても本當に分ると儒教の實踐道德は、佛教の眞理の根柢と協力さるべきものである。更に佛教は

（二）**思想の豐富深遠**　といふことに於て他の總ての教に勝れて居る。これも哲學があるから深遠であるけれども、總ての事柄にさういふ哲學といふ程でなくとも、あらゆる事柄に深味を持つて居る。それだからして豐富にどういふ事柄をも教へて居る、非常に廣汎なる問題を捉へて、さうしてそれに深き說明を與へた點に於て廣くして深き大海の如き意味を持つ、此點が今後文化が複雜になり、

面倒になつて行く場合には、佛教の如く闊大にして深遠なる思想をば人類は之を懷抱すべきものである。此日本文明に於て幸に今日のやうな教が傳はつて來て、世界で佛教を學ぶのは日本だといふ今日名譽を與へられて居る。富士の山が日本の名山として世界の人の賞讃を負うて居るが如く、今後は佛教は學ばざるべからず、而して佛教は日本にある、斯ういふことにならうと思ふ。其時は日蓮聖人の所謂日は東より出でゝ西を照らすといふ時であらうと思ひますが、斯かる意味に於て佛教を有する日本國民は幸なるかなと思はれる。吾々微力にしてそれ程佛教を發揚し得なかつたことは殘念であるけれども、唯隱氣にさういふ意味合は了解出來る。必ず近き將來に於て日本の佛教は日本の光、往いて世界の光なりといふことは認めらるゝに至るであらうと思ふのである。

而して此の三つは互に適當な調和協力を爲すべきであつて、各々其持場々々があつて一つを棄てることが出來ない、一つを棄てればそこに缺陷を生ずる、鼎の三本足のやうなもので一本切れば倒れる、三本各々必要があつて協力して鼎を維持して居る如きものであるが、其協力して居る意味合を少し詳しく話して見たいと思つて、先づ三教の特色を述べたので、更に進んで其調和といふことをもつと詳しい意味に於て話して見たいと思ふのでありますが、若し今申したゞけでも國の事は神道が引受け、實踐道德は儒教が引受け、哲學や宗教の側は佛教が引受けるといふことになつて、國も大事、日常生活も大事、哲學宗教も大事といふことが分れば、宗教と哲學と實踐倫理と卽ち三教が協力せざるべからざる意味も自ら分る譯である。此意味合を最も詳細に考へて置く必要がある。從來三教が一致するとかいふことを唯仲善く暮さう、まあ茶でも呑んで喧嘩をさゝぬやうにしよう、奴豆腐で一杯やつて手を握らさうといふやうな意味で、まア〳〵喧嘩するなといつて神・儒・佛三教が協力するといふ風に考へて、三教調和といふことを言つたならば、何だか便宜的な妥協的な卑しい考の如くに思つて居る人も段々ある。それは皆學び損ひの致す所であるけれども、さういふ意味に於てまア〳〵喧嘩せぬが宜からう、佛教だけやつて儒教の惡口言ふのは人間が卑しいから、言へばいかぬ所もあるけれども默つて居る、そんな感情的な妥協的な便利的なお座なりの三教の妥協を話るのぢやない。思想の眞面目な研究の上に於て三教各々特色を有すると同時に、極めて親密なる調和力を有し、其特色と調和を以て日本の文明を擁護し來つたので、將來も之を中堅にして世界の思想を訓練し、さうして大日本帝國を擁護しなければならないといふ私は信念の上に、理解の上に此ことを申上げるのであつて唯平凡な三教融合といふやうことを申すのではないのでありますから、特に此點を詳細に語りたいと思ふのであるが、今日は餘りに時間が長くなり內容が多方面に亘り過ぎるからして、唯特色といふことに止めて、次の會合の際に三教の調和といふことを話して見ようと思ひます。それ故に今日はこれで此講演を終ることに致します。

（畢）

世法と佛法

小林一郎

今日はお釋迦様の御降誕を慶祝する爲のお集りといふことでありまして、毎年四月になりますとお釋迦様の御降誕をお祝申上げるのでありますが、だん〳〵世の中が難かしくなつて參りますと、愈々以て信仰の必要が感ぜられる譯であります。日本が今度の戰をしてからもう五年になります。國が肇まつて以來外國と戰爭をして五年に亘るといふことは初めてで、日清、日露の兩戰役と申しましてもまア二年と言ふが、本當に言へば一年、或は一年を越えない。又その他昔のことを考へても、神功皇后の三韓征伐とか、或は豐臣秀吉の朝鮮征伐といふやうなことがありますが、何れにしても一年を越えた戰といふものはこの國肇つて以來ありませぬ。今回は珍らしくもまる五年、今年の七月が來ますれば五年を越えるといふ譯であります。これは國肇つて以來の大事であります。又戰爭のことに付ても人の間にいろ〳〵意見がありまして、文句を言ふ人は幾らも文句を言つて居る。これではいかぬといふやうな、かれこれ不平や愚痴はありますが併しながら兎に角國が肇つて以來初めてのことでありますので、こゝの所を無事に越えられるか、越えられないかといふことが、日本人の國民性を試驗することになると思ふのであります。

今まで二千六百年の美しい歴史を持つて居ると言ひましても、これが果して當てになるかならぬかといふことを、世界の國々が皆眼を大きくして見て居る。あの國は古いのだが、昔から大して苦勞もしなかつたのだ。だからまア何とか越えられたけれども、今度はうまく行かないのぢやないかといふやうな考を持つて居るのであります。さうして眼を大きくして見て居る。私共は唯國内だけのことを考へてはならぬ。何とかしてこれは外國に對することも能く考慮してこゝの所を立派に越えて行かなければならぬと思ひます。それには人間の心の土臺をしつかり立てるといふことが何より肝要だらうと思ふのであります。どうも人間といふものは暇な時にはさう惡い料簡も起きないのでありますが、忙しくなるとつい惡い料簡を起し易い、これは當然であります。今も電車に乘つて來ましたが、今頃電車に乘ると人は皆善人であります。おぢいさん、どうぞ……おばあさんどうぞ……と言ふが、これが暮れ方の五時か六時頃の所謂ラッシュアワーの忙しい時になると、その親切であつた人々が皆不親切になる。電車がこんで來ると、この惡い邪魔だと突飛ばして乘るといふやうになつて行く。これはどうも仕方がない。人間が皆善人であり惡人である。その心の中を調べて見れば善人でも惡人の本性を持ち、又惡人でも善人の本性を持つて居る。その善人となるべき本性を佛教の方では佛性と言ひ、惡人になるべき本性を煩惱と言ふ、所謂迷ひであります。これはどうも人間が生きて居る以上はどちらもある。佛性もあれば煩惱もある。迷ひ易い本性もあり、悟りに向く本性も持つて居る。これは免れない。これを何とか整理しなければいけない。

一體世の中が苦しいといふのは佛性と煩惱と兩方あるから苦しい。まるでその迷ひばかりになつて自分の勝手をすれば何でも宜いといふならば、それでも行ける。それから自分を捨てて人の爲だけ考へればそれでも樂だが、どうも私共は兩方に惹かれて居る。或る時には人のことを心配してやつたり、或る時は自分の事を考へたり、向ふへ行つたり、こつちへ行つたり、兩方で引張つて居るでせう。だから苦しい。人生が苦だといふのはそれです。全く自己中心なら、まアそんなに苦しくはない。動物のやうなものだから。牛や馬や熊のやうに自己中心で他を喰ひ殺しても自分が勝手に生きて居る。さういふものも他に強い奴があれば食ひ殺されるが、そんな簡單なことなら苦しみはない。吾々はそれは出來ない。幾ら自分のことを考へても、やはり人のことを考へなければならぬ。だから苦しい。先づ自分を捨てて人の爲にばかりはやれない、或る時になればやはり自分の安全を望むといふこともつい考へられて來る。あつちへ行つたり、こつちへ來たり、人の爲、自分の爲とやつてるからそこで苦しい。それをどうもその儘にして居てはならぬのでありまして、何とかして纏りをつけなければならない。こゝに教といふものの必要がある譯なのであります。今國の爲に皆が己を犧牲にして居ると申しますけれども、世の中の狀態を見ればやはりいろ〳〵愚痴の種はある。

例へば戰に出て國の爲に力を盡して居る者も澤山ある。私の子供なんかも今召集されて支那の〇〇方面に行

つて居ります。ところで子供を戰に出したといふやうな親は世間に多いのでありますが、その戰に行つた者が皆同じやうな境遇で居れば、それで國の爲だからどうも致し方がないと言つて、諦めも致します。併しその境遇は決して同じではない。まア私共の子供は幸福な方で戰に行く七、八ケ月前に就職致しまして、まアさう暮しを十分にするほどのことも出來ませぬが、兎に角仕事は致しました。その職業をやめて戰に行つた。その就職した先では非常に同情を寄せて下さつて、戰に行つて後も毎月俸給はそつくり下さつて居ります。まア折角下さるのですから家で受取つて居る。それから戰が濟んで戻つたらやはり元の地位に還へれるといふことを約束して下さつて居る。その間にもう何だか仕事もしないのに出世をした。何で出世したのか知らないが、まア少し出世したといふので俸給を增して戴いたりして、どうも濟まないと思ふけれども、折角下さるのだから戴きましたが、實に有難い。僅か七、八ケ月働いただけで仕事もしないでも俸給を貰ふ。一年經てば昇給する。歸つて來れば元の職に復せるといふのでありますから何も文句はない。自分の子供のことだから幸福だと思つて居る。出征したといふものゝ息子は向ふで本部附ですから、大した苦勞もなくやつて居る。親父は日曜なのに斯うして喋つて居る。斯

ういふ幸福な者も居る。ところが私の近邊で豆腐屋をして居る人が戰に出た。これは仕方がない。豆腐屋は亭主が居なければ出來ない。そこで店を閉めて行つた。家では細君が人の仕事などしてまアどうやら暮して居るが氣の毒なものであります。戰から歸つて元のお得意があるか、來れば何とかして身を立て直して新しく得意を求めなければならぬ。實に氣の毒であります。私はそれをつくづく思ふのであります。自分の子供とその豆腐屋の亭主を比べて、如何にも違ひが酷過ぎる。私の子供は戰に行つても俸給は貰へるし、又一年經てば昇給する。そして歸つて來れば元の地位が得られる。豆腐屋の亭主は戰に行く爲には職業はなくなり、歸つて來て得意はない。何といふ酷い違ひでせう。實にどうも自分の子供の幸福を思ふと共に外の人の不幸に同情する。

これはほんの一つの例でありますが、世の中には皆この例に洩れないことが多いのであります。同じに仕事はして居ても幸福な者は何とかなります。不幸な者はどうもならぬといふことになります。社會が複雜になればなる程斯ういふ違ひが多くなる。そこでどうしても人間に不平が起る。人間である以上は、あつちに幸福者が居るちやないか、自分は不幸だ……。どうもあつちには儲かつて居る人がある。自分は儲からない……さういふやうになりますれば、これが半藏や一年なら我慢も致しませう。これが三年、五年になれば愚痴も出、不平も起るといふことは已むを得ないので、そこが難かしいのであります。長くなればどうもさういふ問題が起つて來る。それで、若し愚痴や不平を言つて自分の勝手をやつて居る人が多ければ國が持たない。戰も負けてしまふ。斯ういふことになるのでありますから、この際こそは人間の本當の正しい信仰といふことが力を持つて來なければならぬだらうと思ふ。宗教家が斯ういふ際に奮起して來なければ今まで宗教とか何とか言つて居た甲斐がないのであります。南無妙法蓮華經とか南無阿彌陀佛とか何とか言つても、それはまア「南無」位言ふが、斯ういふ時に心から正しい信仰を持つて行く。何處までも、どんなに苦しいこと、辛いことがあつても、そこを越えて行くといふ心持を持つといふことは容易ではない。今が本當に宗教を弘める。又信ずる人の責任を全ふする時であらうといふやうに考へられます。

六百年の昔に日蓮上人が立正安國、正しきを立てて國を安んずると仰つしやつた。その心持が本當に分るのであります。立正安國といふのは正しい教を立てて人の心を正しくして、人の心を正しくすることに依つて國を安んずるといふことでありますが、實際國を安んずる爲には人間の心の土臺を立て直さなければならぬ。これは容易なことではありませぬ。今の時代を考へますと本當に立正安國といふことが肝要だといふことがしつかりと感ぜられるのであります。

何と言つても今は容易ではありませぬ。國と國との間の關係が人と人との關係のやうになか〳〵行かない。本當言へば人間は個人の間では、それは利害損得の衝突もあるけれども、義理とか人情とかいふものが相當ある。國の間に義理人情はない。これは仕樣がない。まア利害損得で自分の國に利があるなら何でもやる。その代り自分の國に損が行けば何でも振放してしまふ。さういふ狀態が昔から續いて居ります。でありますから、昨日まで仲を好くして居た國も、直ぐに、自分の國を考へて敵となる方が宜いと思へば交際を捨ててしまふといふことは少しも不思議ではありませぬ。これは長い間の慣習になつて居ります。

日清戰爭、日露戰爭當時にイギリスやアメリカが日本を大變に援けました。日本の勝つやうにいろ〳〵力を添へました。特に日露戰爭の時などアメリカへ行つて軍事公債を募集したところがなか〳〵その人氣が好く、又その公債に應募して呉れた人があつた。イギリスがやはり

同じやうに應募して呉れたこともありました。まア英米の援けに依りましてあの軍事費の三分の一位は助かつた。それから殊にあの戰をする時、海戰に於てはイギリスで建造して居りました、日進、春日といふ二つの艦を日本に譲り渡して呉れました。一體局外中立の國は戰をして國に、戰爭に必要なものを賣るといふことは出來ないがイギリスはあの時は非常に勇敢で、國際の法律なんか無視して日本にあの二艘の艦を賣つて呉れた。あのお蔭で戰爭には非常に都合が好かつた。こんなやうに日本に對しまして隨分好意を表して居りました。そのアメリカやイギリスが今は手の裏を返すやうに日本に對して迫害を加へ、蔣介石を援ける。日本の都合の悪いことをやつて居る。こんなことだけを考へますと何か不思議なやうに思へますが、能く考へて見れば少しも不思議はない。あの日露戰爭前にはロシヤといふものが非常に恐ろしいものであつた。イギリスやアメリカは何とかしてロシヤの勢力を抑へたかつたけれども、自分の國から理由もないのにロシヤを相手に戰をする譯に行かない。幸ひにして日本がロシヤと戰をしたから、日本に出來るだけ力を添へてロシヤをやつけようと思つた。ナニモ日本に同情を寄せたのぢやない。ロシヤを敗かしたいといふことの爲に日本に出來るだけの同情を寄せたのであります。それだけの話。日本がロシヤを敗かして大分勢力が強くなつて來るとこれはいけない。そして今度は日本を敗かさうといふ。これは何も不思議はない。同じことであります。何處か弱い國があるとそれを援けてやる。ロシヤが強いと日本を援け、そしてロシヤを敗かさうと思ひ日本が強くなると支那を加勢して日本を敗かさうとする。何も方針がある譯も何でもない。終始一貫して少しも變らない。故にこんなことは決してないことでありますが、萬一蔣介石が日本を敗かして強くなるとアメリカやイギリスは外を援けて又蔣介石を敗かさうとするでせう。國際關係といふものは斯ういふやうなものでありまして實に淺ましいものであります。

この際に於て私共は自分の理想を言へば國と國との關係が、家と家との關係、人と人との關係と同じやうになるやうにしなければならぬ。斯う考へて居りますが、これは急に出來るものではないのでありまして、兎にも角にも自分の國が力がなければ、何と言つても世界では相手にならぬ。又相手にして呉れない。そこで何といつても吾々の屬して居る日本といふ國の國力を養うて、國をしつかりさせる。日本の言ふことなら何でも聽く、耳を傾けるといふやうに國そのものを力强くする以外に方法はない。そこでお互が眼の前の所を考へれば働いても運の良い者もあり、運の悪い者もある。戰の爲に儲けた者もあるし、又戰の爲に損した者もある。損した者からは殘念だが、そんなことを言つては居られない。何と言つても國が盛んにならなければならぬ。各々が自分の我儘を捨てて自分の都合を捨てて、國を何とかするやうに、この國が何處まで戰爭しても堪へ切れるほどの國の實力を養ふより外に途はない。さういふ所まで來てしまつた。まア有體に言うとさういふ譯であります。どうも愚痴を言ふと殘らもある。物價の統制がどうとか。消費の規正がどうとか、いろ〳〵問題があるけれども、これを文句言つても仕方ない。それをかれこれ言つてたのでは仕樣がないといふことになつてしまつたのであります。實にどうもこれは考へて見ると困つたことナンですけれども仕樣がない。そこで何とかしてお互が私を捨て〻、我慢の出來ない所を我慢して、辛抱の出來ない所も辛抱して、さうしてお互が自分の勝手を止めて協力一致しなければ國が持たない。日本の國が持たないやうになれば、まア東洋九億三千萬の中で本當に英米を相手に出來る國は日本だけナンでございますから、日本が持たぬといふことになつたら、支那も持たぬし、印度も持たぬし、結局東洋全體が滅茶々々になつてしまつて、西洋人の横暴なことを、殘念だと思ふけれども許して置くより外ないといふことになるのでございますから、どうもこれは仕樣がないのです。斯ういふ時に生れ合せたのですから是非共我慢の上に我慢して、そして世の中を何とか立て直すやうに骨折るより外ないでありませう。

その爲には私共は信仰を勵まなければならない。人間には自分の我儘をする所の心持——所謂煩惱もある。又自分を捨て、世の爲、人の爲に力を盡したいといふ所謂佛性も備つて居る。其の佛性を育て、煩惱を除く爲には何と言つたつて自分達の力だけでは出來ないのですから、所謂教へを求めるより外ない。教への力といふものはそこにある。大きなものです。考へて見れば。自分の勝手をしたいと思ふが、自分の勝手をしたのでは自分も滿足が出來ない。花が咲いて綺麗だと思つたつて、一人アヽ綺麗だと思つたんぢや詰らない。一緒になつて「アア綺麗な花ですナ」「綺麗ですネ」と話合ふと快い氣持になつて、何だか花が綺麗になつて來る。今日なんかも一人で寒い〳〵と思つたつて仕樣がない「寒うございますネ」「寒うございます、どうも困ります」斯う言ふとちつとも困らないやうな氣分になる。自分を捨てるといふことが本當に自分の滿足ナンです。これが人間の本性ナンです。そこが佛性であります。どうしたつて一人ぢや居られないのです。餘り世の中が忙がしいと、世の中

を離れて一人になりたいやうな氣分もするけれども、何だか一人ボツンとして居たら詰らぬ。やはり寒ければ寒いと言つて話合ひ、暑い時には暑いと言つて話合ひ、花が良ければア、綺麗だと話合ふ、そこに人間の滿足がある。人間といふものは一人ぢや居られない。人は人間、人間といふのは人が交はるといふことが本當なんでありまして、一人で居れば淋しくて嫌やになつてしまふ。西行法師といふ人が、自分の友達が死んだといふので世の中の無常を感じて出家をする、六つになる女の子がすがり寄るのを振り離して緣の下に落して立ち出でたといふやうな話さへ傳つて居ます。成程世の中はうるさいと思つたでせう。が世の中がうるさいと思つて出家して、山の中へ入つて庵を結んで見たけれども、どうも詰らない。やはり一人ぢや居られないといふやうな氣分になつて歌を作つた、

淋しさにたへたる人のまたもあれな
庵ならべん冬の山里

モウ自分は淋しさを我慢して居られなくなつた、誰か淋しさに我慢するやうな人がモウ一人欲しい、さういふ人と庵を並べて話合つて我慢しよう。こんなことを言つて居る。どうも自分一人ぢや耐へられない。誰か仲間が欲しいといふことを、正直な人ですから有體に歌に詠んで居ります。まアさういふやうなもんです。實に人間といふものは一人ぢや居られないのです。ギリシヤのアリストートルといふ哲學者が「人間は社會的動物なり」と申しましたが、如何にも其の通り、どうしたつて一人ぢや居られない。お互に嬉しいことは喜び合ひ、悲しいことも慰さめ合ふといふことで、初めて人間といふものが世の中に生きて居られるのでありまして、これが人間の本性ナンですから、この人間の本性に基いて、所謂慈悲を敎へる、慰さめ合ふ、助け合ふ、救ひ合ふといふことが大切だといふことを敎へられました佛の敎へといふものは、何も佛樣が勝手に考へたんぢやない。人間の本性を本にして立てられた敎へナンでありますから、これを捨てる譯には參りませぬ。

そこで今のやうに複雜な世の中になりますといふと、どうしてもこの敎へを皆が學んで、さうして私を捨てるといふことに專ら力を盡さなければならぬので、それが、家を全うする道であり、國に盡す道である。ナニモ無理ぢやない。それをやらなければ銘々が滿足出來ない。だから人間の本性を本にして、お互に助け合ひ、お互に救ひ合ひお互に慰さめ合ふといふ心持ちを擴げて大きくすれば宜い。斯ういふ時代が今やつて來て居ると思ひます。この時代に際しまして丁度四月の初めになり、お釋迦樣の御誕生を御迎へ申すといふことは、極めて意義が深いのであります。どうか私共はこの心持ちになつて隨分世の中が忙しくなりますと、自分の勝手ばかり考へるやうになり易いのですから、さういふ際に己を捨てるといふことは辛いことナンですけれども、併しその辛いことを我慢してやつて居ると、それが人間の本性に適ふのだから、結局それが喜びになる。昔賢經といふお經の中に斯ういふ言葉があります。

衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。

人間色々罪を犯す。人を欺いたり世間に迷惑掛けたり色々な罪を犯す。人間が罪を犯すといふことは、例へば寒い日に草や木の葉に露や霜が掛つて居るのと同じやうだ。これはモウ限りがない。毎日々々罪を犯して居る。丁度露や霜が草の葉、木の葉に置いて居るのと同じやうである。これをどうしよう。どうも露がある霜があると思つて箒を持つて行つて掃いたつてモウ草の葉や木の葉は皆掃き切れるものぢやない。それは無駄だ。併しながら空に太陽が出て光が照り渡つて暖かになると、露や霜は何もしないだつて消えてしまふ。それと同じことだ。人間が間違つた行ひをして色々な迷惑を懸けて居るといふことは、露や霜の多いのと同じであるのだが、これを人が坐つて居てどうしよう〳〵と考へたつて仕樣がない。それよりは空に太陽が輝くと同じやうに、世の爲、人の爲に力を盡さうといふ氣分が起つて、自力の骨折りが幾らかでも世間の役に立つのを喜ぶといふやうな心持ちになると、その罪は消えてしまふ。丁度太陽が出て暖かになると、露や霜が消えると同じことである。ですから私共が坐つて考へて、俺は迷ひが多い、どうしたら宜いだらうと、幾ら考へたつて仕樣がない。なほりはしない。反對のことをやれば宜い。俺はどうも慾張りだ、物が欲しいと思つて居る、何だか慾が深い。どうしたら宜からう。どうしたら宜からうと考へないで、人に施すことを進んでやれば宜い。施すといふことを唯やつて、初めは骨が折れるけれども、段々やつて人に施すことが喜びになりさへすれば、貪るといふ心持はなくなる。俺はどうもやきもちやきだ、人が幸福になると氣持が惡い。どうしたら宜いだらう。さう唯考へたつて仕樣がない。人の喜びを助けるやうに皆に親切にすることを努めてやつて、自分の親切が人の爲になつて嬉しいといふことが分りさへすればやきもちの心持ちはなくなる。何と言つても反對のことをやるより外仕樣がないのです。自分の迷ひを除かうと思つたら、人の爲に骨を折つてやつて、初めは骨が折れるけれども、段々それが習慣になつて、骨が折れないやうになつた時に、何時の間にか自分で氣が

付かない間に迷ひはなくなつて行くのです。それより外に方法がない。どんなに考へたつて、人間凡夫だから初めは迷ひが多うございます。その迷ひの反對のことをやるのです。初めは骨が折れます。これがまア煩惱です。併し自分が世の爲、人の爲に力を盡すといふことは苦しいが、その苦しいことを我慢してやつて居ると、段々習慣になつて、結局はそれが喜びになる。人の爲に力を盡すのが嬉しいとなつて來れば、除かうと思はないだつて自分の心の迷ひはなくなつてしまふ。これがまア所謂信仰生活といふのであります。斯ういふやうになつて來る。今の時代に際會致しますれば、これより外ないのです。何と言つたつて前にも後にも所謂進退谷つたやうな狀態になつて居るのでございますから、努めてこの人間に備つた佛性——佛と一致する所の精神——を發揮致しまして我慢を致しませう。さうして世の爲、人の爲に力を盡して、それが段々習慣になつて來れば、自分が元の凡夫の境涯から離れて居るのでございますから、こんな有難いことはない。斯ういふやうな生活を續けることが、即ち世の中を救ふ道でありますし、又緣あつて法華經を信じ、南無妙法蓮華經の七字を一度でも二度でも唱へたその緣を全うすることになるのでございますから、これを以て一貫して行くより外はなからうかといふことを本當に感じます。私などはどうしてこんなに法華經に緣が出來たのか分りやしませぬけれども、まア何とかして緣があつたのであるから、これから一つ大いに奮發致しまして、何とかして忙がしくても愚痴を言はない、骨が折れても何とも文句を言はないといふやうな決心を固めまして幾らかでも自分のすることが世の爲、人の爲にお役に立つならばこれを喜びとする。實はまだそこまで行つて居りませぬ。有體に言ふと骨が折れれば嫌やになる。今日も此處が終つてから神奈川縣の戸塚まで行くのですが、こんなお天氣ですけれ共約束したんだから仕樣がない。まア兎に角自分の約束を果す。さうして自分の心を滿す。さうして滿し得た後は快い氣持で、今日一日も無駄ちやなかつたと思ふ。骨が折れるが、骨の折れた後は快い氣持です。だから自分は凡夫だが、ちつとは佛性があるのかなと熟々思ふのです。さういふやうに致しまして自分を勵まし、自分で努めて、何とかしてこの道を貫いて行けるだらうといふことを痛感した譯でございます。有難いことに毎日法華經を讀みます。毎日題目も唱へます。佛樣に向つて掌を合せた時には、普段の自分よりは幾らか氣分が明るくなるのでございますから、この心を持ち續けまして、御同樣に勵まし合ひ、御同樣に戒しめ合つて、何とかしてこの場合を通り拔けて行くといふことが、立正安國と仰せられた日蓮上人の教へを全うする途でもあらう。斯ういふ風に考へて居る譯であります。これは有體の御話です。この頃大分世の中が苦しいものですから、どうしようかと考へたその結果、益々これより外ないのだ。自分に斯ういふ途が與へられて居るのだから、この途を全うするより外にないだらうといふことを感じまして、益々これで行かう。私もモウ大分年取つて居ますから、どれだけ生きるか分りませぬが、生きる間はこれで行かうといふことを思ひ定めて居ることを有體を申上げて、今日のお話を終りたいと思ひます。（之元）

釋尊御降誕慶讃會案內

教主釋尊と大東亞の建設とには甚深の因緣あることを思ふ。從つて本月大聖の御降誕會は一層意義深いものと拜します。

爰に本部に於ては五日の日曜日午後二時より大會を開催致し、市民錬成に資したいと存じます。お誘合せ奮つて御參加下さい。

財團法人　統一團

本佛實在の宗教哲學（十）

河合陟明

九

故に吾々の自覺的意識が大發展をなし、吾々の悠久不滅なる個體生命が人格的向上を成し遂げて、己心卽全法界を歷する元品の無明を斷破し、以て己心の心田を開拓し盡したときは、ここに遍滿法界的なる絕對の佛性卽十界性卽法性眞如が朗然として顯現し、自己は事理法界の全象を at one stroke 一望の中に直觀するに至るのである。これが位妙の終極完成たる三法妙であり、十妙における向上門としての自行の因果の最後なる、佛果菩提であるのである。本有・本覺・本用の圓融一如なる眞の統覺作用は、ここに成立つのである。さきにもいつた如く、卽ち實在の根本要求たる自覺的限定が、その限定作用の極限に達したときは、卽ち又その實在の本有內包量の極限に達するのである。換言すれば、實在の全質量の濃度又は密度の原理的飽和度が、現實的飽和度となる。更に換言すれば卽ち實在の本質、卽己心の本質の全面的顯現に達するのである。それが人格の完成であり、生命の究極であり、時の完了であり、歷史の超越である。ブルンナーのいはゆる Endgeschichte 終歷史といひ、Ewigkeit 永遠界といふところのものは、まさに此處に現れて來るのである。それはいはゆる geschichtliches Auf und Ab 宇宙の生類の歷史的浮沈興亡、經にいはゆる諸の衆生の沒在於苦海を遙かに超え出でたる解脫涅槃の境である。而してかくの如き人格化の極限に於て根本實在たる眞如法性の極限に達する、二者は畢竟一である。これを無作三段に於ていへば、修の極限に於て性の極限に達し、しかもそれは卽ち證の極限に達したる果上の無作としての證無作となる、證無作とは證性の無作である。

ここに至つて一心の心性としての、本有卽本覺體系における理的無作なる本能有の覺性が、事卽ち人格的・叙智的

に絕對超越的となり、いはゆる空諦ノエシスを佛果として完成して第一義空の妙慧を成就し、これに對して本所有の覺藏が絕對內在的となつて果上に於て自在に受用し限定せらるる假諦ノエマの三千となる。境智冥合してしかも智が境を包攝し、西田哲學を以ていへば述語面が主語面を完全に包攝するのである。ここに卽ち眞如の理心が極果の事心となり、卽ち佛心となり、理體の法性が果上の佛陀となり、法身が證法身となり卽ち報身となり、又應身となる。その初法身壽命、性相凝湛、不ノ同ニ報應一（文九）ものが、此に至つて妙覺圓滿、果上無事、眞常湛然（玄七下）たる報身となり、更にこの大覺菩提の證智の上より無限の大活動に出づる應身となつて、ここに敎化門・救濟門・秘妙大方便門が開出されるに至るのである。

ここに於て智悲を一括して、しかも智的範疇に於ていへば、衆生及び菩薩の如量智なる權智の極限に於て、佛果の如理智なる實智に達し、ここに於て再び翻つて如量の權智を受用するところの、權實融妙の智悲の活作用としての向下門的救濟に出づるのである、卽ち佛界果上の緣起感應に出づるのである。その初原理的なる質の量化尽る量の極限に至つて再び質に達し、この高次的なる質的絕對現實の立場より、再び量を開くのである。佛果における全實在の直觀體系としての佛智及び佛德を再び限定し、卽ち有限相對化し、向下的に部分的體系化して衆生に施與する。これを救濟的緣起における感應道交といふ。宗敎的特に救濟的意味に於て因緣亦名ニ感應一、それは佛陀よりする衆生への叙智の體系化である。智と德、或は知と善との體系化的施與である。衆生自身の自發的なる善の實踐と佛陀感應的活動とは、此に於て結合するのである。二者はもちろん各々別であるが、しかも亦一つに結びつく。

先にもいつた如く、衆生は法性といふ transcendentale Psychologie 先驗論理的なるものを推論的體系化し、或はその先驗論理的なるものは直ちに先驗心理 transcendentale Psychologie 的なるものとして、いはゆる知來藏中實理心なる非人格的或は未人格的なる覺自體として、先驗的意識として、カントのいはゆる Bewußtsein überhaupt 意識一般、或はむしろ Persönlichkeit überhaupt 卽ち超個人的なる原理的人格一般ともいふべき、無作本有なる先驗的意識の體系が、直ちに推移發展して經驗的なる自覺的限定作用となり、換言すれば、歷史の不斷の根源たるところのものが直ちに歷史的時の創造的事實となりきたり、ここに卽ち我々の行爲的直觀の反省的連續として discursiv 比論的なる思惟體系化的に向上せんとし、卽ちいはゆる佛性向覺し、これに對し佛陀はその經驗完成にして統覺的絕對智なる全

直觀體系を部分化して、救濟に出づるのである。一言にして言へば、衆生は不覺より自覺に向つて向覺し、佛陀は自覺より覺他に向つて救濟するのである。この二面を、廣い意味に於ては、總て統覺といふことができる。十妙における後半の五妙として化他の能所たる、感應・神通・說法といふ佛陀の三輪の大化、及びそれによる眷屬妙及び利益妙といふ、この半如意珠をして全如意珠たらしめるところの果上の五妙は、ここに開展してくるのである。ここに一人格における自覺的體系の發展と完成と、而して實にその永遠無窮の活動とが、開かれてゆくのである。

宇宙原理の科學的組織化ともいふべき一念三千の哲理の敎ふる如く、佛陀も五蘊積聚の個體的人格であり、色心を一具して相好常住なる實在者であるが、しかしそれは衆生とは異り、佛陀の五蘊は大涅槃・常樂我淨の五蘊であり、非有漏非無漏陰界入であり、佛陀の三身は理智悲の積聚としての事體であり、その事體の內容としての內智であり、その智と一如し又この智より發するところの慈悲の感應であり、淨用であり神通力であり、救濟であるのである。この事體・內智・悲應を一括して佛陀の智願といふ。佛陀に於てはまさしく靈智及び慈悲、菩薩覆法界であり、常樂重香、爲積聚義のである。しかも佛果の開覺はただに吾々人間のみでない。さきにもいつた如く、萬有はその本質に於て悉く覺自體なるが故に、よくその性を全うし、その生命の自覺を究極完成すれば、即ち萬法悉く成覺し、草木國土悉皆成佛して、ここに宇宙生命の永劫進化の大理想を顯現し、即ち佛敎の大理想たる十界皆成といふ大目的を完遂し得て、以て法界萬法の實相がここに終局を告ぐるのである。

かくして覺自體の完全顯現とは即ち成佛であり、佛陀そのものである。原始的・先驗的なる理としての覺自體が、事としての現實的・人格的なる覺自體となる。いはゆる理の本覺が事の始覺となる。ここに於て覺自體なるものは忽然として佛自體となる。元來理覺自體は理の佛自體なのであつて、從來の佛敎史、特に天台の壽量本佛論の因果有始といふ有限性をいかにかして絕對無限の無始の實在として充足せんとして、ひたすら、この方向に欣求渴望と探究模索とを續け來りし日本中古のいはゆる本門天台は、つひにその眞の實在の佛陀の求められざるを知るや知らずや、この無作本有なる理としての佛性、在迷因位のさりながら根本實在たる覺自體そのものを以て、つひに本佛と考ふるに至り、ここに佛敎思想の根本的誤謬と雜亂と混沌無秩序、然り眞正なる佛陀の喪失・修行の喪失・人間の喪失・無明の喪失・法性の喪失・因果の喪失・大覺菩提の喪失・ないし一切眞正なる實在と自覺と實踐との喪失・顚落・雜糅・混亂を惹起せしめ、しかも滔々としてこの潮流は思想界を風靡するに至り、ここに日本固有の神道思想をも誤らしめ以て神佛二敎の間に思想的畸形兒、ブルンナー的にいはば Transcendens und Immanens 超越と內在との限界を竊取したる Hybrid あひの子を產出せしめるに至り、しかもこれが實に今日の日本の思想界・神道界をもなほ誤らしめてゐるのであつて、更にしかも未だ殆んど何人よりも、明らかなる哲學的叡智を以て、これを指摘し分析し、且つ眞正なる最後の解決、いはゆる法華の獨特法門たる最高の開顯統一、即ち若破若立、法華之意といひ、或は破若立の決一に法華にありといふ、その最後にして最高なる解決、即ち一種の religiöse Entscheidung（ゴーガルテン）宗敎的決斷を齎せるものあるを見ないのであるが、しかしかくの如き佛性としての覺自體なる唯理的根本實在は、無作根本的に覺の原型であり、佛陀の原型ではあるが、しかしながら斷じて、それは未だ佛ではない、理佛法身は佛と名くべきでない、佛身の根柢を佛と名づくることはできない。何となればそれは未だ非人格的理法として超時空的・超個人的なる無形無相の根本實在たるに止まるからである。理の本佛性は決して未だ眞の事の即ち人格實在の本佛ではない！

大涅槃經における明白なる敎說の如く、法名二爲覺、佛名二爲覺。無作本有なる法性としての佛性としての理本覺は、未だ佛陀に非ざることいふまでもない。眞の佛陀は、この理の覺自體を開覺顯現したる、いはゆる修顯得體したる、事の始覺の佛陀でなければならぬ。然しながらかく無作の理を有作の事化したる、その極限としての有始の佛陀なるものは、なほ未だ眞に十全なる意味において佛自體といふことはできない。苟くも佛陀たるものは絕對ではあるが、未だ遂にその有始の始覺なる點に於て時の部分たるに止まる。畢竟して有限相對なるを免れない。これ佛敎史が苦悶し模索し失望し混亂して、つひに異端傍系に墮したる所以である。これに對して最後の解決たる眞の佛自體は、更に百尺竿頭一步を進めて、無始の佛陀そのものに於てこれを求めねばならぬ。しかし佛敎の原則たる、否、苟くも凡ての實在の原則たる、即ち凡ての眞理の原則たる、即ち凡て廣く哲學的一般の眞理として、存在の理由を說くべき因果の理法に從ふ限り、飽くまでも有始でなければならぬ。これに反しもし實在の要求より直ちに無始を取らんとすれば佛敎原則に反しまた眞理に背いて、從來の佛敎史の誤をくりかへし、從つて現代に於て島地大等氏の告白するが如く、基督敎的獨斷不合理なる神とならねばならぬやうである。そも〳〵も法華經壽量顯本における久遠實成の佛陀とは有限か、無限か五百塵點は果して有始か、無始か、我本行菩薩道とは因壽か、果壽か、久修業所得とは分か、滿か、

慧光照無量、壽命無數劫なる佛果の光壽二無量は果して分か極か。

否、眞の佛陀は、飽くまでも因果を破らず、因果を全うして實修實證し、しかもその實修實證を無始に完了して、無始に大人格を完成せる、無始實在の佛陀なるものでなければならぬ。これを實に「本佛」と稱するのである。眞の佛自體はかくの如き眞正なる意味における本佛に於て、始めて正しくこれを見出さねばならぬ。ここに於て始めて全く、無作本有の理の覺自體は無始本有の事の佛自體に至つて、ここに實在論を究極するを得るに至るのである。法界は無始無終に亙つて、本佛常住なる大事實・大眞理に於てあることを、凡ての學・凡ての知識・然り特に凡ての哲學的知識と凡ての人類は必然的に認識するに至らねばならぬ。信仰は此に始めて成立つのである。

十、本有體系の教系

さてかくの如き本佛の實體とは、果していかなるものであらうか。今やいよ〳〵この探究に入らんとするに當つて一たび上來の所說を要約し、而してそも〳〵いかにして本佛の實在が認識せられるに至るものであるかといふ Quid juris 即ちカントのいはゆる認識論的根據、その Möglichkeitsgründen apriori 或は Rechtsgründen apriori 先驗的眞理根據・妥當の根據そのものを、反省してみたいと思ふ、本佛の問題とは、一言でいへば即ち、眞實在に對する自覺の問題である。稍聞いてこれを二言でいへば、本佛といふ完全實在を目指しての、眞如といふ根本實在の自覺の問題に外ならない。即ち眞に絕對なる實在認識の問題に外ならないのである。

而して實在とはそも〳〵いかなるものであるか。天台のいはゆる

以二此妙慧一、如二金剛斧一、所レ擬皆碎、如二無レ翳日一、所レ臨皆朗一(玄九上)

かくの如き妙慧・佛眼・佛知見を開いて、實在といふものの內面を照破したとき、實在即ち有があればそこに知があり、しかも知が有を包んで、實在即ち有自體は覺自體をなしてゐるのであつて、かくて實在は有と知であり、又有があればそれが用であり、かくて有と用となり、又知が即ち用そのものでもあり、そのものともなるのであるから、かくて一個の實在即ち一の有なるものがあれば、ここに必然に有と知と用とを成立せしめる、或は原理的に既に成立せしめてゐる、即ちその凡てを內面に含んでゐるのである。知を取るも又用に就ても全く同樣のことがいへる。三者はかくして全く圓融相即するのである。ただそこにおのづから有と知と用、即ち中・空・假の特色或は性質を保持してゐるのである。かくして境智、即ち對象と認識、即ち假と空を考へても、また知用、即ち認識と行爲、或は知見と作用、即ち照すことと働くこと、即ち空と假とを考へても、又は境智用、或は有と知と行、或は色心業の三者を考へても、いかなる相對關係やまた三者鼎立關係を考察するも、凡て圓融無碍であり、即ち統一的である。これは超時間的先驗界即ち無作本有の狀態に於て然りなのであり、換言すれば實在即ち本有は先驗的に即ち無作に、實在原理と認識原理と作用原理(或は行爲原理)との、この三者の一如なる關係をなすところの本有體系であり、一如體系であり實在體系である。ヘーゲルが konkrete Wahrheit 具體的眞理は System 體系をなし Wissenschaft 學をなすといふこゝも。この意味に於て妥當する。從つてかかる先驗的實在が經驗的に現れた、即ち經驗的に自覺したところの、しかもその純粹創造的・內面的・生命的なるものとなつたところの、純粹自覺或は純粹經驗として、知に於ても、行に於ても、或は純粹思惟、或は純粹認識、或は純粹反省、或は純粹直觀、或は純粹志向、或は純粹實踐、即ち純粹自己實現作用といふ行爲的自覺、いはゆる實修實證なる無作の修行・無作の妙觀妙行に於ても、この三者の圓融なる關係が成立つのである、否ここに於てこそ始めてましくそれが體驗しまた認識し即ち自覺されるのである。

かくして理に於ても事に於ても、また因に於ても果に於ても、客觀も主觀も、天台の三諦三觀の法性實相は、妙樂のいはゆる無作諦であり無作觀であり、また約理・約觀・約果・即ち予のいはゆる性修證三段無作體系におけるいかなるときに於ても有と知と用は常に相即一如的である。從つてその一の不備は他の二の不備であり、一の完備は三總ての完備である。これを有にとつてみるとき、有が不完全であれば知も用もまた不完全であり、從つて有自身が發展して、即ちその自己充足を要求して、換言すれば、有がその自己所有、むしろ能有を要求し、從つてここに知と用が發展して、無限の歷史的時間に亙る向上に於て、その働きを開展して、有をしてその有性即ち實在性を充足し、從つて價値性を充足せしめる。何となれば、有の發展とは知と用の發展、即ち自覺と行爲の發展、いはゆる行爲的自覺の發展であつて、而してその自覺とは實在そのもの有そのの本性に適ひ、否、本性そのものであり、即ち實在は覺自體であり、本有は即本覺であり即本行であり、有は即知亦即用であり、即中は即空であり即假であり、かくして客觀的に三諦圓融なるもの、從つて主觀的に三觀圓融なるものが、即ち法性であり、法性は心性であり、心性は覺性であり

覺性は佛性であり、佛性は自覺するものであり、即ち不覺より自覺に向つて向覺し、而してつひにその自覺を完遂するところの能力を本有するものである。換言すれば、佛性としての、否その性としてのノエマ的なるものを佛としてのノエシス的なるものになし得るもの、從つてなさんとするの meaning reason（ライブニッツ）普遍的動向を有するものであり、且つそれを實現しまた充足するものである。「佛性」とは「性」を「佛する」ものである、ノエマをノエシス化するものである、無作本有として從つてむしろ未だ非有的なるところの空的なる假諦を、有作今有としてしかも自覺的智的なるところのものとして假的なる空諦化するもの、否、假諦的なる空觀化するもの、いはゆる第一義空なる妙智、即ち超時間的永遠の自覺の叡智に化するものである。「性を佛する」とは、佛性を、然り佛性が佛性を佛乘化しゆいて、つひに完全に佛陀化することである、即ち佛陀となることである。勿論單に佛性の獨力によつてではなく、ここには大いなる本師・先佛の感應の協力が加はらねばならぬ。かくしてここに一個の有における知と用とは自己自身を充實して、その絶對完成に於ては用は終り、働くものを超え、歴史を完結し、時を完了し、意志を終息して妙覺圓滿、果上無事、眞常湛然たる十全の知・絶對智・即ち菩提を成就するに至る。ここに於て無作なる本有は一個の完全なる今有として、高次的なる純粋叡智的超時間性に於てあるものとなるのである。即ちここに始めて完全なる人格としての意義を充足するに至るのである。しかしこの立場より、顧つて未完成なる即ち時の中に於てある存在者に對して、救濟といふ再び高次の働くものとして、しかも descending course 向下門における意志的交渉と行爲的活動が、開始さるるに至るのである。

かくの如きものが眞如理本覺體系の現實的自己體系化である。本は自ら統である、それは必ず統である。即ち中道統一的である、統一的ならざる本なるものはない、本とは即ち常に全體統一的である。故に理本覺とはまさしく先驗的統覺力であり、統覺作用であり、そ が經驗的に現れて自覺となり始覺となり、今覺となる。或はかかる自覺的體系を、有即ち實在のシステムとして論ずるならば、即ち本有が行有となり、今有となり、それが完成して成佛即ち自己の成道開覺、即ち佛陀の始覺といふ、今有と本有との合體、或は今有の完全なる本有への centrosum 的 centrosum 發展的還元となるに至るのである。

かくして實在は根本的に認識論的原理に於て存在してゐるのであつて、而して又そのことが直ちにそのまま、實在は行爲的形式に於て存在してゐるといふものであるのである。自覺の原理は直ちに作用の原理であり又然かなるのである。一言でいへば、この知も行も一括してこれを限定作用の原理といふことができ、實在そのものと相ひ對して、ここに體用といふ概念或は二面の範疇が生ずるのである。

顧つて大藏全典の最高なる開顯統一の經王たる、妙法華經に於てはそも〳〵如何。由來法華經に於ては、序品第一よりしてまづ佛陀の眉間白毫相の光明、見として東方萬八千の世界を照す 此土他土の四華六瑞裡に、歴々として顯れ來たる六道の衆生の生死所趣、善惡業緣、受報好醜と、さらに諸佛如來・聖主世尊の梵音深妙、講說正法、照明佛法開悟衆生と、また更に二乘および菩薩の厭老病死、志求勝法、種々因緣、種々信解、種々相貌の行菩薩道と、即ちここに法界の全實在者たる十界の人格の存在を明し、その千種萬樣の活動狀態を示し、次で如來の金唇おもむろに法輪を轉ぜらるるに至つた方便品に於て、ここに法界の諸法實相として、十如是を說き、開佛知見を說き、一佛乘を說き、一切種智を說き、一大事因緣を說き、但敎化菩薩を說き、以て十界の人格實在をして究竟して、佛性向覺と佛陀統覺といふ一實諦の理念の因果に結べるは、即ち實在における體用の範疇を、詳細に且つ實在の根本動向に隨つて價値追求の方向に具體的に展開したものであつて、いはゆる佛智に約して實相を說くといふは即ちこのことであり、即ちそれは換言すれば、佛陀の認識論であり、且つ敎濟論であるのである。而して天台がこの十如是に就て三轉讀文としての空假中三諦を說き、これを眞如法性の性德の理となすは、實在に關してその內面的固有の認識論的原理を明らかにしたものである。ここにいはゆる境智論が成立つのである。さらに天台は遠く龍樹を承けて、この三諦を開いて有門・空門・亦空亦有門・非有非空門といふ四門となし、それは即ち中道の双照双非の妙用を開いて、この四門となしたるものであり、而してその双非門に於ては、ここにいはゆる双非理極即法身也（文九）といふ實在の原理を論ずべく、これに對しその双照門に於ては、まさに双照智極即報身也といひ、乃至、双用悲極即應身也として、ここに認識および敎濟の原理を論ずべく、否或は寧ろ、双照に就て そこに三千歴然たる妙有を論じ、双非に就てはそこにこの萬假の三千を一空攝して即中道なる眞空を論じ、妙空を論じ、第一義空を論じ、以て妙有實在に對する超越的にして且つ包容的なる佛智の妙慧を論ずべく、而してこの超越的妙智がその內包的妙有たる三千萬象を、しかもその理具性德の三千としても、或は事具果報の三千としても、何れにせよこの妙有三千を自在に受用し自在に限定するところ

に、予のいはゆる双用の悲極たる應身の感應的救濟活動を論ずべく、かくして四門三諦の關係は、互融相即して窮るところなきものである。現代に至つて西田哲學が、場所とそこに於てあるものといふ特有の述語論理を發揮し、一般者の自覺的限定として無と有を論じ、又フッサールの Phänomenologie 現象學的用語を援化したる、ノエシスとノエマといふことを盛にいはるるのも、亦同樣の意味を物語つてゐるのである。而して西田哲學が無といふところのものは、むしろ無作の本有なるものとして論ずべきであつて、ここに本有體系がまづ成立つのであり、それが一層眞の實在の概念にふさはしいといふべきである。單に西洋の文化は有の文化であり、東洋の文化は無の文化である、などといひ得られるものでない、いひ盡せるものではない。けだし眞の實在概念・實在體系は、無作本有なる眞如より無始本有なる本佛に到達せなければならぬものであるからである。その論理的表現形式は異るが、天台が既に空諦と假諦といふ、即ちノエシス的とノエマ的なる Noesis 認識論的構造を、法性の實在に就て明かにし、而してかかる實在そのものはこの二面を双非し双照する中道として論じてゐるのである。眞理の探求と歸結は、實に東西古今を貫いて易るところがない。まことに天台および妙樂等が盛に三諦々々と三諦を論じ、即空即假即中を論ずるは、深き所以あることである。しかのみならずこの空假中は、今いふが如く相即圓融して三諦九諦伸縮包容・自在無碍なるものであり、特にこれを實踐的に修道開覺の方法論として、自己の己心に觀じ、以て眞實在を把握せんとするところに、ここに不思議一心三觀が成立つのである。これ自己の佛性開發・佛知見發得、或は佛眼・一切種智證得の爲の妙觀妙行であるのである。摩訶止觀といふのは實にこの妙觀妙行の實修實證であり、その發展體系であり、いはゆる法華三昧の實踐であるのである、故に天台自ら不思議止觀・絶有爲止觀・絶生死止觀・一大事止觀等と名け、更にこれを敷衍したる妙樂が輔行傳弘決の勞頭に於て、

故大論云・言二摩訶一者・名含二三義一・謂二大・多・勝一・用二此三名一・釋二圓三觀一・正當二題旨一・大是空義・多是假義・勝是中義・是故改從二・衆含之名一・以題二一心三觀之部一・以是應知・止觀二字・無非二摩訶一・即是一心三止三觀之止觀也・故知總攬二一部一・以爲二首題一・始自二大意一・終於旨歸一・無非二摩訶之止觀一也・是則題名是總・十章爲別・於二十章中一・則大意爲總・餘八是別・故知總別・自行因果・化他能所・咸是摩訶妙定慧也（止一ノ一）

と光焰萬丈の讃美的解說を施してゐるのはまことに偶然でない。大・多・勝の空・假・中は、これ實に空諦ノエシスと假諦ノエマとこの二面を包む中道實在そのものとを表す。實在と認識、認識と行爲といふ如き、實在に關する根本原理を既にここに表してゐるのである、即ちそこに含まれてゐるのである、止觀一部は實にその體系的發展に外ならない。而してその三諦を開くとき、ここに古今獨歩の妙觀たり且つ一大綜合的佛教教理體系として、はたまた深遠なる實修實證の實踐的歷程たるところのものとして、いはゆる一念三千の玲瓏たる天地が打開されきたるのである。

（つづく）

南無妙法蓮華經

昭和十七年　沽洗十三日　七十六年前　聖師の御誕生日　太平洋岸に於て。

靜かにおもふ

金城三郎

この頃はしゞに戀しも法の道　深くたづねてわれ行かめやと
法藏うて旅をし行かむねがはくは　佛といもに居たくぞおもふ
なぎつ瀨に浮きつ沈みつうつし身の　戀ふるは深き法の道かも
うき事をいまは離れて一人かも　靜かに居むと佛に向ふ
末法の惡世なりとは聞きしかど　いがみのゝしる聲のすさまし
ひがごころあだしこゝろも消え失せて　法の高根に澄む月ぞ見し
慾のためひしめきあへる世の故に　佛の道はいや有難し

研究篇

天台大師の實踐哲學

礫川鷄山

第三節　摩訶止觀

一　項　大　意

摩訶止觀は天台大師が大隋開皇十四年四月二十六日より荊州玉泉寺に於て、一夏、朝と晩に講ぜられたものである。大師嘗つて師南岳の下を辭し金陵（南京）に傳道する事八年、遂に天台入山を決行した。其の理由として、（一）は徒衆多くも眞の求法の者少なきと、（二）は北周の破佛の行はれたるを聞き理論的解決を得んが爲めである。大師は入山の翌年華頂に降魔した。その後十年を經て遂に陳の天子の請に應じ金陵に大論等を講じた。後に故鄉荊州の華容縣に地恩奉謝の爲め玉泉寺を建立し、法華玄義摩訶止觀を講じたのである。即ち本書は大師が最も思想は圓熟し、最も心血をそゝいで講義せられた所謂『大師己心中所行法門』である。其の說く所の圓頓法門は師南岳の圓頓思想を發揮大成せるものである。

今此の書の心髓要領であり、古來圓頓章として特に天台家に尊まれた章安の序を引用する。

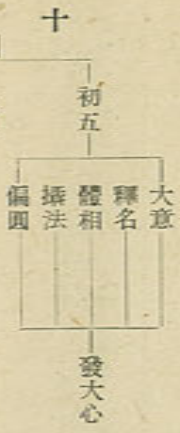
圓頓者。初緣二實相一造二境卽中無一不二眞實一。繫二緣法界一一念法界。一色一香無レ非二中道一。己界及佛界衆生界亦然。陰入皆如無二苦可一レ捨。無明塵勞卽是菩提。無二集可一レ斷。邊邪中正無二道可一レ修。生死卽涅槃無二滅可一レ證。無レ苦無レ集故無二世間一。無レ道無レ滅故無二出世間一。純一實相實相外更無二別法一。法性寂然名レ止寂而常照名レ觀。雖レ言二初後一無二二無一レ別。是名二圓頓止觀一。

諸法は實相である。諸法は實相なれば萬物都べて十如十二因緣等あり。よつて萬物は境妙である。境妙なれば眞實の智は妙である。そこで因緣を法界に繫け、一念を法界に等しくすれば一色一香中道に非ざるない。陰入皆如なれば苦つ捨つべきない。されば無明卽菩提となり生死卽涅槃となる。純一の實相にして法性の寂然なるを止と名け、寂にして常照なるを觀と名く。此を圓頓止觀と云ふのである。

最初に章安の序あり。章安は此の摩訶止觀を非常に尊崇した。卽ち此の止觀序に於て天台を佛陀に、自らを阿難に擬した。經序の、

如是我聞、一時（時間）佛住（場所）……とあるのをその儘止觀序に依用して本書の由來を論じてゐる。

本書は十章あり、大略左の如し。（本書「正藏四六・五頁中」の意を取りて造つた音寂の表に隨ふ）



（抄眞書復眞全佛教本日大 P. 398）

大意とは所謂五略の事にして、五略とは發大心、修大行、感大果、裂大綱、歸大處を云ふ。

此に對し或る人は左の如く見る。然るに二十五方便を發大心と配するは尤當ならず。よつて今は此の解釋に隨はず。

一、大意とは五科を立て止觀の大綱を說く故五略と云ふ。止觀に「五略はたゞこれ十廣」と云ひ、十廣に圓の如く五略を配す。五略の第一發大心は正しき菩提心は四諦、四弘、六郞により組織せられるを說き、第二の修大行は四種三昧を說く（後の修行の章に詳しく論ずれば今は略す）第三感大果は因行に對する果報である。若し行が中道に順ずれば卽ち勝妙の果報あり。第四裂大綱は自行の因により果を成ずれば必らず化他行あり。人の堪任するに隨ひ法を說くを云ふ。第五歸大處は前四を具する事により自ら三德に入り、又他をして三德に入らしむるを云ふ。

二、釋名章とは止觀の名を釋するに相對、絕對の上より三止三觀を以つて三德に通ずるを說く、玆に云ふ三止とは息義、停義、對不止止義であり、三觀とは貫穿義、觀達義、對不觀觀義である。

三、顯體章は體理淵源なるも粗々四意によせて體を顯はせば、一教相、二眼智、三境界、四得失である。それは理は教を藉りて彰はる。教法既に多ければ相を用ひて顯はし、入理の門不同なれば眼智を用ひて顯はす。諦權實あり。故に境界を用ひて顯はす。又人に差會あれば得失を用ひて顯はす。以上の四によりて圓頓止觀の教相を說く。

四攝法章とは止觀の名は遍ねく諸法を收む。

何となれば止は諸法を寂とし、觀は能く理を照らす、故に一切の理・惑・智・行・位・教は都べて止觀に攝せられる。

五偈頌章とは止觀に攝せられる一切の諸法を大小、半滿、漸頓、權實の五法により分別し此の圓頓止觀のみ圓妙最極なるを明す。

六方便章は二十五方便を明す。（その名目は禪門要略、小止觀、次第禪門と同じ）注意すべきは

修行法—┌二十五法—遠方便
　　└十種境界—近方便

と說き、前の五略の修大行との關係如何である。（摩訶止觀に「五略はたゞこれ十廣」と云ふも廣略の關係では說明出來ぬ、次に論ずる事あるべし）

七正修章に「前六は修多羅によりて以つて妙解を開く」とあり。前六は此れ教相にして正しく今章は妙解による正行を明す。即ち妙解による妙行——智目行足相ひ資け行解既に動むれば三障四魔紛然として競ひ起る。止觀を開すれば一陰入界、二煩惱、三病患、四業相、五魔事、六禪定、七諸見、八增上慢、九二乘、十菩薩の十境である。十境の最初一陰入境とは現前の法の構成で此の手近なもの即ち凡夫現前の第六識の心を第一觀境とす。

二煩惱境とは凡夫現前の心に煩惱起る事あらば此を觀境とす。三病患境又凡夫に身病と心病と現はれる事あり、其の時は病患を觀境とす。四業相境とは病患を身心に觀ずれば進んで生死輪を動かす業相を觀ず。五魔事境とは業相の次に善生惡滅に就き留難百出して其の道を壞する不測の魔事あり。六禪境とは魔事決せられ禪起る。七諸見境とは禪により猛利なり邪慧を态にす。八增上慢境以下三境は大師一夏竟りたれば遂に說かず。十種中最初の陰入境は常に之を觀じ、二煩惱境以下は起るに隨つて之を觀ず。此の十境各々の觀心に十法あり、即ち十乘觀法である。一觀不思議境とは一念心を觀ずるに具足して三千性相、百界千如を減ずる事無し。此の境に即して即空即假即中である。次に起慈悲心とは妙境によつて無作の四弘を發し、己を憫み他を憫みて上求下化する。三巧安止觀とは前の妙理を體して常恒に寂然たるを名けて定と爲す、寂にして常に照すを名けて慧と爲す。四破法遍とは三觀を以つて三惑を破す。三觀一心惑として破せざる無きを云ふ。五識通塞とは苦集、因緣、六蔽、塵沙、無明を塞と爲し、道滅、六度一心三觀を通と爲す。通は護るべく塞は破すべし。六修道品とは無作の道品一一調停して宜きに隨つて入る。七對治助開とは正道障り多く四理開けざれば事助を修す。即ち五停心、六度等である。八知次位。以上の第一より第七に至る間の七門に理觀の正道も、事行の助道も悉く具足してゐる。そこでこれより觀法に非らずしてその用意である。初心の行者少し修行し得る所ありて上慢に墮するを懼れて位を知らしむるのである。九能安忍とは五品の行者內外の誘惑に打ち勝つを云ふ。十無法愛とは相似十信位に著する事なく初住眞實位に入るを云ふ。

八果報章、九起教章、十旨歸章は夏安居の期終りたれば說かず。然るに幸にも五略により大綱は窺ひ得る。然して摩訶止觀は法華經の能釋にして古人の云く「名字を代へて法華を說く」と。まことに本書は法華經の思想を根柢としたる實踐門と云ふ事が出來る。

更に吾人が今考察せんとするは四種三昧と十境十乘の觀法である。即ち五略の修大行は四種三昧を說き、正修章は十境十乘の觀法を說く。止觀に「五略は亟是れ十廣」と云ふも廣略の關係で說明は出來ぬ。勿論四種三昧と十乘觀法とは內容も異る。そこで如何に見るかと云ふ問題が起る。四種三昧は別傳によるに大師最後の遺誡にある如く一波羅提木叉（戒律）は是れ汝の師なり。我常に說けり四種三昧は是れ汝が明導なりと。……」と最後迄重んじた。波羅提木叉とは戒律にして、四種三昧は止觀で定慧に當る。又正修章も十境十乘の觀心を說く。然も前の方便章は遠方便にして戒に當り、十境十乘の止觀は近方便で定慧に當る。よつて兩方を如何に說いたか。摩訶止觀卷一には種々十章を分別す。

(一)┌前八章—即俗而眞
　└果報章—即眞而俗
　　└旨歸章—非眞非俗

(二)┌正觀章—一分是定
　└餘八章—一分是慧
　　└旨歸章—非定非慧

(三)
- 前八章—自　行
- 起教章—化　他
- 旨歸章—非自非他

(四)
- 大意＞正觀—共
- 果報・起教—不共
- 旨　歸—非共、非不共

以上によつて見るに、(二)の見方によらば正觀章は一分是定なれば禪定と見、餘の八章なれば五略も慧と見た。又天台大師は四種三昧の說明の條に、

四行爲緣觀心。

と說く。卽ち四行を因緣として觀心すると云ふ。然し此は兩者の說明とならぬ。又古來の諸師も殆んどその關係を論じてゐない。又止觀自身も不明瞭である。今第一期禪觀書、小止觀・六妙法門・次第禪門の觀心のみ說きし禪觀あり。又一方には方等三昧、法華三昧と三昧をのみ說けるものもある。然るに第二期に於ては摩訶止觀の如く三昧と觀心を竝べ說いた。

そこで今天台大師は行法を如何に見たかを考察する。天台は敎學を二分し敎門と觀門とした。又行法を信行・法行と說く。(敎相と觀心の章往見)

よつて今止觀の四種三昧と十乘觀法を敎觀二門に配す。卽ち、

摩訶止觀
- 敎門—信行—四種三昧—佛—恩
- 觀門—法行—十乘觀法—法—聞
- 聞慧具足
- 信法互具

となる。天台大師の摩訶止觀及び其他の諸書に是の如き見方の明文なしと雖も、恐らく天台は是の如く考えたらうと思ふ。摩訶止觀の立場から云はゞ決して信行法行は孤立したものでない。四種三昧と十乘觀法も內容はともかく形式は異るが同時に修するのである。然らば何故四種三昧を信行に配するかと云ふと佛陀を觀じその敎を聞くからである。此に對し十乘觀法を法行に配するは心法を觀じ。その心法を思ふからである。更らに四種三昧を廣義より見ればその中に金光明懺法、請觀音懺法等を含んだ天台大師の一切の三昧・懺法と見てよいと思ふ。何となれば十境十乘の觀法は一切の行法の根柢となるものだからである。是の如く吾人は摩訶止觀の立場より見んと欲す。

- 信行のみの立場—方等三昧懺儀。法華三昧懺法等々。
- 法行のみの立場—小止觀、六妙法門—次第禪門等々。

〔天台大師第一期の述作は多く右の如し〕

玆に第二期特に摩訶止觀の優越性を見る。又古來天台敎學を讃美して敎觀雙美或は解行相資と云ふは信法二行の互具圓融なるを云ふのである。是の如く見てこそ天台則傳の、

唱三二部經、爲三最後聞思。

との聞思の意義を解する事を得。卽ち聞思とは、

- 聞—信行—四種三昧—敎門
- 思—法行—十乘觀法—觀門
- 敎觀雙美

で四種三昧、十乘觀法を爲した事であり。又信法二行を爲したのである。

更らに天台敎學全體の立場より見れば、

- 敎門—敎正觀傍—(敎門も亦敎觀二門信法二行に分けられるも託事付法なれば略す)
- 觀門—觀正敎傍
  - (敎門)信行(四種三昧)
  - (觀門)法行(十乘觀法)
  - (摩訶止觀等)
- (法華玄義等)

となる。

(續)

× × ×

余此より旬日にして征途に立たんとす。余不肖なりと雖も本化末流として祖師の名譽にかけても身命を賭して奮鬪せん事を誓ふ。親愛なる讀者諸兄姉よ！ 余が拙論を最後まで讀まれし事を謹んで謝す。願くは讀者諸兄姉よ！ 正法興隆死身弘法に精進せよ。これぞ佛祖への唯一の報恩行なる事を銘記せよ！

維時昭和十七年睦月十四日記之

本化末流　蝶川鶏山敎白

優婆塞戒經要解（其六）

本多日生

自他莊嚴品第十一

若し譏毀を聞かば、心に能く堪忍し、若し讃歎を聞かば、反つて慚愧を生じ、道を修行せん時は、歡喜自慶し、憍慢を生ぜずして能く惡人を調へ、離壞の衆生を見ては能く和合せしめ、人の善事を揚げて他の過咎を隱し、人の慚耻する所の處は終に宣說せず、他の祕事を聞いては餘に向つて說かず、世事の爲に呪誓をなさず。

是は自ら利し、他を利する以上に各自の德を進めて行くのであります。所謂人格を完成して行くといふやうな譯で、莊嚴といふは、修養の完成を意味し、益々その智德を輝かして行くのであります。

人格を磨いて行くには、他から誤りを聞いた時にはそれに堪える。又讃められたからといつて調子に乘つて高慢振らない、却て慚愧の心を起して、さう讃めて貰つては困る、迚も讃められる者ではないといつて、讃められた時には更に反省して奮勵する。それから道を修する時分には歡喜の心に滿ちて、而してその喜びは、人から與へられるのでなく、自分の心の底からよろこぶ『歡喜自慶』すとありますが、この歡喜自慶のお經文は非常に結構であります。さうして慢心を起さないで、却つて人の惡い癖を正してやらんければならぬ。『離壞』といふのは、人を仲たがひさせたか、或は世間の團結を破壞したりすることであります。彼方へ行つては惡口をいひ、此處へ來ては惡口をいふ、折角氣持ちよくやつて居るのを氣を腐らしてしまふ、而して會合を衰頽させるといふやうな事があります。さういふ事をする者が幾らもありますが、さういふ壞れかゝつたのを寄せて來て、まあ〳〵さういふ爭をするものではないといつて護り立てる。それが『離壞の衆生を見ては能く和合せしめ』といふのであります。

それから人の善いことは揚げて、惡いことは隱す、是が東洋の道德であります。西洋人は正直に惡い事でもいふのが良いと申しますが、あれは文化の程度が低いからであります。凡そ人の善い所を揚げて、惡いことを隱くすやうにして行く所に、社會の善良なる風俗が作られるのであります。僞らない告白だ等といつて、間男をした事などいつて斯の如きを以て得たりとして居る。あゝいふ頭は餘程どうかして居る。儒教にも揚善といふことを云つて居ります。佛教にもその思想が現はれて居ります。是は東洋倫理の尊い所である。惡い事を見ても、その惡い事をいはぬといふのは、屢々佛教徒が教訓されて居る事であります。他の過ちを隱すばかりでなくして、人が慚しがるやうなことがあつたならば、知つて居つても知らない風をする。斯ういふ事をいつたら、あの男が赤い顏をするだらうと思ふやうな事は、自分も忘れるやうにして人にも言はぬといふのが、是が社會を圓滿にして行く原動力であります。他の祕事を聞いて他人に向つて說かぬ。

それから『世事の爲に呪誓をなさず』呪誓といふのは、今日の言葉でいへば證人であります。故に世間の事に就て證人などにならぬ、是は累を受けない爲であります。いゝ加減な事に證人となつて、その問題に引つ張り出されたり、詰らぬ事に一々掛り合になつたり、惡い事ではないけれども、彼方にも此方にも手を出して、色々な談判をくつては自分の仕事が出來なくなるから、さういふ詰らない係累を避けよとの教であります。眞の親切で盡して行くのは別問題であるが、人の爲だといつて掛り合になり、それが爲に妨げられるやうな事はせないやうにせよと警告されて居ります。

二莊嚴品第十二

菩薩二法を具足すれば能く自他を莊嚴す。一には福德、二には智慧なり。施・戒・精進を福莊嚴と名づけ、忍・定・智慧を智莊嚴と名づく。佛・法・僧を念ずるを智莊嚴と名づけ、戒・施・天を念ずるを福莊嚴と名づく。若し能く是の二莊嚴を具足すれば、則ち微妙の善巧方便を得て、世法及び出世法を了知せん。

菩薩摩訶薩、五法を具足すれば、則ち能く無上菩提を莊嚴せん。何等をか五となす。一には信心、二には悲心、三には勇健、四には世論を讀誦して疲厭を生ぜず、五には諸の世業を學んで亦之を厭はず。

次に二莊嚴といふは莊嚴の内容であります。前の自他莊嚴は、如何にしたならば得らるゝか、それには二つある、即ち道德と智慧とであります。教育勅語に『智能を啓發し、德器を成就す』とあるのがそれであります。此所には六波羅蜜を二つに分けて夫れに充てゝありますが、大體に德に屬する方と、智に屬する方の二莊嚴をやつて行く、その德と智とが完備して來れば、そこに世を濟ふに就ての巧妙なる方法が分つて參ります。唯だ知識だけあつて德が無いと、思想問題でも面白半分にやる人もあり、それが影響は恐るべきものがある。智德並び修して始めて社會を救濟する人と爲るのであります。理論と實際の側を併せ考へるから、そこに適當なる方法が案出されるのであります。

夫れから又五つの事をやれば菩提が莊嚴される。それは信心・悲心・勇健・世論・世業である。是が非常に愉快に拜されるので、信仰と慈悲と、勇氣とそれから世間の書物と、世間の仕事を學んでせよといふのであります。信心と慈悲とは何處にもあるやうであるけれども、勇氣と世論と、世業を併せて菩提が莊嚴されるといふ事は、今の佛教徒

の深く味はなければならぬ事であります。

攝取品第十三

善生の言さく、世尊よ、菩薩二莊嚴を具足し已つて、云何にして徒衆弟子を畜ふるを得ん。善男子よ、應に四攝を以て之を攝取すべし。諸惡を離れて諸の善法を增さしめ、至心に教詔すること猶ほ一子の如く、恩報を求めず、名稱の爲にせず、利養の爲にせず、自樂を求めず。善男子よ、菩薩若し是の如き等の事なくして弟子を畜ふる者は弊惡人と名く、假名の菩薩にして、義の菩薩にあらず旃陀羅、臭穢、不淨、破壞佛法と名く。惡弟子を畜へて教誨すること能はず、乃ち無量の衆生をして惡をなさしめ、能く無量の善妙の法を誘る、和合僧を破り、多くの衆生をして五無間を作らしむ是の故に惡律儀の罪よりも劇し。

出家の菩薩、若し在家の弟子あらば、亦當に先づ不放逸の法を教ふべし。不放逸とは即ち是れ法行なり、父母、諸師、和上、耆舊、有德を供養して安樂を施し、衆生を憐愍して諸の國王・長者・大臣に於て恒に恭敬怖畏の心を生じ、能く自ら妻子眷屬を調伏して怨親を分別し、衆生を輕しめず、憍慢を除去せよ。在家の菩薩、若し在家の弟子を畜ふれば、亦當に先づ不放逸の法を教ふべし。不放逸とは父母、師長、和上、耆舊、有德を供養し、復當に兄弟、妻子、親友、眷屬に供給すべし。又復教へて三寶を信向せしめ、苦樂共に俱に終に偏獨せざれ。在家の菩薩、若し自在を得て國王とならば、民庶、護擁すること猶ほ一子の如く、諸惡を離れて善法を修行せしめ、能く國人をして常

に王所に於て父母の想を生じ、因を信じ、果を信ぜしめよ。

次には摂取といつて衆生を済度する事が説いてありますが、即ち菩薩は、今申した徳と智の二荘厳が出來上つたら、どうして自分の弟子を養ふたら宜しいかといふ事を問ふたのです。是は善生といふ長者が、問を設けたのであるが、その時に、釋尊が答へられるには、自分が師匠になるには、四つの事を以て率ゐて行かなければならぬ。その四攝法といふのは、その弟子の程度に應じて教育をして行くこと、弟子が幼稚であるのに面倒な事をいつては駄目であります。その程度を計つて行かなければなりませぬ。又優しい言葉を以て教へる。『そんな事が分らぬかッ』といふやうな事をいつてはいけない。それからその者の爲になるやうに幸福を圖つて行く。さういふ風に色々親切な意味からしてやつて行かないと、弟子を持つても亦信者を作つても、それを教へて行くことが出來ません。それで其等を導く方針は、道徳生活である、悪い事をしないやうに、善い事を増させるやうにする、教へるにも一生懸命に教へてやらなければいかぬ、自分の可愛い一人の子供に大切な事をいつて聞かせるやうに、正成が、正行に櫻井の驛で遺言したやうな精神を以て、此事は言つて置かなければならぬといふ眞心を以て教化して行くならば、それに導かれて弟子・信者は必ず良くなつて行く。教へたからといつて『俺の恩を覺えて居るか』といふやうな事をいつてはいかぬ、受けた方では殺し恩報じをしないでも構はぬ、利益の爲にしない。又自分がそれが爲に樂しむといふやうな考を持たないやうにする。單に法を思ひ、その人々を愛する爲にやるのであります。已れに斯ういふやうな人格の修養が足つて居らないで、弟子を持つたり、信者を率ゐたりすると、詰らない事が起つて來る。さういふ者はそれは弊悪人である『弊悪人』といふ言葉は餘程ひどい言葉であります、人格の壞さてしまつた者である。『弊』といふのはスタレルと云ふ字であります、だから弊悪人といふのは、人格の打ち壞れた人である、豆腐に鍼、棟に釘といふやうな人で、幾らいつても駄目な人をいふのであります。（次續）

記事

本部園報

三月八日 第三回大詔奉戴の記念日、晨朝六時恭しく修法及び法話。此の祠りに私共は一層深く大東亞戰爭の意味合を了知すべきである、敢て近視眼的でなく、遠く由つて來る處を觀察して徹底せる最後の完勝と千年の建設に思を致すべきであるまいか、夫れには先づお互全國民の人格を一層向上せしむべく精進せずばなるまい。口ばかりの闘示は此際許されない、進んで引導し教化すべきであり、そこに眞の建立が實現することを念思する。

祝賀記念 三月十二日は大東亞戰捷第二次の祝賀日と定められ、諸方面に於て夫れ夫れ意義ある行事が展開された。本部では朝の清淨な大氣に浴しつ、拝礼階上御寶前を厳飾して大衆一結、至心に法味を捧げ、益々皇威宣揚と武運長久を祈願し、又尊い陣病殁の諸靈位御回向に擬し、終つて十餘の有志は先月と等しく大支題旗を先頭に堂々法被を撃つて帝都の大通りを一巡教時間を要し、其の功徳を三軍に供養したことを衷心より歎ぶものである。

本多上人 早くも日生恩師の第十二周年忌をお迎へした。御命日の前日十五日が日曜日に相當するので、此日午後一時、本部に於て報恩會を營んだ、同師會員始め、古參の關員各位、遠く横濱や浦和、千葉邊からも隨喜參列され、和賀、山口師等と御遺族を中心に一同は奉安されたお寫眞を謹仰しつつ熱誠溢るゝ法味を捧げた。特に感激に堪えないことは、こゝに申し上ぐることも如何かと思はれるが、毎年山田博士のお宅から必ず御盛物をお供へ下さることで、殊に本年の如きはすべてに不如意の中から種々の御配慮をたまわる其の御芳情に、有難涙が止め度なく流れる。去る者は日々にうとしとか、人情は益々輕薄となれる現代、而かも十年を超へた今日いよ〳〵道慕新たに御奉仕の御心情、誰れか感慨せざるもの があらうぞ。

宗祖大聖人は『貧に佛に成る道は師に仕ふるには過ぎず』とか『佛に成る道は善知識には過ぎず』と仰せられ、自ら給仕第一の範をお示し遊ばされた。行と學は第二第三である、こゝに日蓮義の特色存すと拜される。然るに出家沙門の身であつても果して給仕が成されてゐるや否や、自ら反省した時にどんな心持ちであらうか、或る者は自分天狗になつたり、或る者は迷信新興に溺れ、或る者は退轉し、或る者は名利を追ひ、或る者は二乘に墮す等々、世間から度視されるゝも故なきに非らずである。大法光顯の前後は既に燦然として現はれつゝ發ほ實報に見ないのは此等で留めてゐるからであるまいか、慄るべき大罪といはねばならぬ、お互は深思すべきであらう。

毎日の仕事が段々忙しく繁雜になつて來るに鑑み、せめて年一回のみゝる師恩道慕の清筵には一日を割いてお仕へ致したいものである。これも佛天の大きなお慈悲のお計らひと思はれる、私共は一同本部の法要をすませて、後にお茶を戴く暇もなく、大

急ぎで銘々に品川へと向つた。三時、懐しい妙國寺の本堂で、大泉師の懇ろな御回向と更に晴々する美しい生花の盛られた祭壇に御焼香させて戴き、萬感交々到つて去るに忍びない。人々の様子を眺めた時、滿足氣の中に何だか淋しさうに寞はれた。ゆつくりと各位の御感想をも拝聽致したかつたが、時間空撲様等で惜しい名殘をそのまゝ散會とした、時正に四時十五分。

南無妙法蓮華經

彼岸會 大東亞戰下第一回の春季到彼岸會を迎へ、赫々たる大戰果と同時に幾多の尊い陸結靈を追悼し、殊に又私共の昵懇にして戴いた佐藤提督や福本同信等の新歸寂に對し、出來るだけの回向供養を捧げたいものと二十二日第四日曜日午後二時から和賀上人の導師によつて皮修させて頂いた。有難いことに佐藤中將の奥様はお孫様の御案内で參列され、福本未亡人も御令息及びお友達と共にお焼香下さつた。『一死一生の交情を知る』と古人の話にもあつて、元氣の時の友情はお互の事であり思つて我が爲となるが、只逝いた跡の弔ひこそ貧の志であるまいか、そこに人の人たる道がある。こゝに純潔な清信の男女、其の數こそ僅か三十名足らずでも、義理合で集つた數千の徒衆と異り、心からなる法味を捧げて道悼に資する事の尚來たのは實に希有のことであつた。

法要後、和賀、磯部、本郷の三氏から有益な法話を聽聞するのみならず、本多犯下の『彼岸會の眞意義と發願力』なる小冊子をお頒ちし、盡せぬこの法筵を閉會したのは五時半頃であつた。

種々書きしるしたい事もあるが、貴重の用紙漸減で乍遺憾割愛する。

其他 毎週土曜日午後一時半修法、二時小林先生の陸愛經講座。又毎月曜日朝六時信行會が開催されてゐる。はちす結人會は第一及び三の土曜日である。時局柄奮つて爲法國御參加を望む。

福島支部報

二月二十四日 高商知春莊に於て例會。福岡先輩、橋本先輩も列席した。當日は福島としても珍らしい大雪であつた。かゝる時もおひとひとく磯部先生の御來教を頂いたことは感謝に堪えぬ。先生より知法思岡の精神に寄いて御法話を賜つた。國家主義と個人々格の完成とは圓滿に調和すべきである。次いで福岡先輩より北支に於て殺横に活躍されし尊い體驗に基くお話があつた。

同日夕 大町中村様方に於て支部例會。修法の後磯部先生壽量品講講及び福岡氏の感話發表があつた。

酒悅立正產業報國會記

三月八日、日曜日の第三回の大詔奉戴日は、朝六時より統一團御寶前に於て、磯部先生御導師の下に一同敬修する。

御寶前で、先生が宣戰の御詔書を拝讀なされたときは、十二月八日のあの緊張した當時が偲ばれた。我々は十二月八日をしつかりと心に銘じ、聖戰完遂に邁進しなければいけないと固く決意をなした次第である。

三月十二日、戰捷第二次祝賀日の祝日である。第一次戰捷祝賀日から一月も經たない内に、皇軍は全蘭印を無條件降伏せしめ、進んでラングーン迄も攻略して終つた。

怖るべき神速で各地に戰勝する皇軍の輝かしい祝日を、我々は何う祝へばよいか。このことを會長に議つたところ、旗を立てゝ行進しやうといふことに即座に決す。旗といふのは、先月第一次戰捷祝賀日に、磯部先生から頂戴した本多御上人染筆の御題目を大書した長さ一間半の大旗である。

祝賀日には、朝六時から一同御寶前でお勤めをさせて頂いた。午前七時三十分、陸軍省へ向つて行進した。朝風になびく南無妙法蓮華經の大旗の下、太鼓を打ち鳴らしながら心から歡びに打ちふるへたのだつた。

陸軍省へお祝に行つた開發では、我々が一番だつた。朝早いので陸軍省ではお祝ひを受付ける用意もまだやつてない、受付で間違ついたりしてやつと連絡がつきそれで會長から敬しく御祝辭を申上げた。陸軍省玄關前で聖壽萬歲、大日本帝國陸軍萬歲を奉唱した。

我々は、四谷見付、市谷と行進し、九段の靖國神社に參拜し、謹んで英靈の御冥福を祈願した。

靖國神社の參詣を濟まして、直ちに宮城前へ行つた。宮城前では、ずつと二重橋の際まで進み聖壽萬歲を奉唱し奉つた。この日は第一次戰捷祝賀日よりは宮城前も人出が少いやうな氣がした。

我々は櫻田門の方から海軍省を訪れ、聖壽萬歲、大日本帝國海軍萬歲を奉唱し、新橋から銀座通りを通つて、京橋、日本橋、萬世橋と行進した。

この日の行進は相當の道程である。それに朝疾いので、殆んど全員朝食前であつた。七時三十分に統一團を出て、太鼓の叩き通しで十一時四十分伊町御寶前に着く迄約四時間だから疲れた者も出た。止むなく萬世橋際に小憩して、這進駐在所で水を頂戴したりした。

お這進さんはとても親切な方だつた。お茶を上げませうかなどゝ云はれた。靖國神社や宮城前の奉祝の摸様をたゞねてゐられた。第一次戰學祝賀日の人に比べると少いやうだとお話したら、もつと誠意をこめて奉祝しなければ、前線の兵隊さんや亡くなられた英靈に申譯がありませんね、などゝ話して居られた。日本人は何うも眠きぼくて困るとも云つて居られた。全くその通りである。

伊町の御寶前で、無事終了の御報告を申上げたときは一同ほつとした思ひだつた。滿身淋漓たる汗をぬぐひ、食事に臨んだ時は、たゞに感謝と法悅のみだつた。

斯うした境地は、信仰したものでないと味はえない心境である。安閑としてゐては絶對に得ることの出來ない心境である。

我々は、朝三十分のお勤めでも一日の愉悅が得られる。まして四時間も太鼓を叩き通して歩いた後の喜びなどといふものは、普通では想像出來ないだらう。

十五日の日曜日は、本多御上人の十二回忌御逮夜に當る。一同は午後一時から統一團の法要に列し、後品川の妙國寺の御上人の墓前に參詣した。生前上人に教を受けられた色々の方々がお出でになられた。

御上人の御命日は、我々には實に懐かしく慕はしいものである。御上人の御命日は我々に色々な意味で精進になる、朝夕に接

する御上人の御寫眞の美麗が、この日は特に親しく拜される。御上人の御命日は、寒い冬が解放されて彼岸前の暖かい季節に向ふので、殊更に懐かしくもあるだらう。更に角御上人の御命日を期して我々の信仰が彌が上に燃え上ることは嬉しみである。御上人のみ手が何時も我々を護つてゐて下さることは何といふ事であらう。時局柄益々道念を堅固にしなければならぬ。（金城記）

團費誌料維持費及寄附金領收

（自二月二十一日至三月二十日）

一金貳圓貳拾錢也　小田原　坂井日好殿
一金貳圓貳拾錢也　山形縣　遠藤壹次郎殿
一金貳圓四拾錢也　大阪　廣野貫慈殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　村田竹次郎殿
一金貳圓五拾錢也　福島縣　橋本美芳殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　近藤舜子殿
一金貳圓五拾錢也　同　原田精造殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　川手海詳殿
一金五圓也　東京　黒須源太郎殿
一金六拾圓也　横濱　中村清兵衛殿
一金參圓也　東京　宇野博順殿
一金貳拾貳圓也　青島　竹原寶瑞殿
一金五圓也　東京　堀田辨戒殿
一金拾圓也　東京　榎本まさ子殿
一金貳圓五拾錢也　同　三浦儀三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　竹原小三郎殿
同　森克彦殿
一金貳圓貳拾錢也　銚子　時友太助殿
一金貳圓貳拾錢也　福島縣　橋本民居殿
一金參拾圓也　同　美芳殿
一金拾圓也　栃木縣　木村喜知次殿
一金貳圓貳拾錢也　神戸　林重太郎殿
一金五圓也　東京　鈴木二光殿
一金貳圓貳拾錢也　同　鳥龜太郎殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　安藤政治郎殿
一金五圓也　新潟縣　中野廣殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　箕輪喜一郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　鞆眞蓮殿
一金拾圓也　同　池田悦太郎殿
一金拾圓也　東京　沼部彌太郎殿
一金五拾圓也　同　井上市造殿
一金貳圓貳拾錢也　同　平松市藏殿
一金貳圓五拾錢也　高岡　島山友次郎殿
一金壹圓也　福岡縣　大久保久市殿
一金參圓也　山口縣　芝木ツル殿
一金貳圓五拾錢也　萩　小島經彦殿
一金貳圓五拾錢也　東京　石川顯隆殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　稻葉いく殿
一金貳圓五拾錢也　同　佐藤嘉平殿
一金貳圓五拾錢也　同　佐藤愛子殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　平井一正殿

右雜有入帳仕候也（以是領收證代用）

財團法人統一團會計

統一　一冊　金貳拾錢　送料壹錢
定價　半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
○御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共ニ御通知ノ事

昭和十七年三月二十七日印刷納本
昭和十七年四月一日發行
（第五百六十五號）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京市四谷區内藤町一
印刷人　山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

（不許複製）

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十七年四月二十七日印刷納本
昭和十七年五月一日發行（毎月一回一日發行）第五百六十六號

目次

信心の心得（上）……本多日生
開目鈔講話（承前）……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（十一）……河合陟明
教歌……長松清風
記事
○本部圖報　○產報會記　○入帳報告

第四十七年　五月號

統一
明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十七年三月二十七日印刷納本
昭和十七年四月一日發行（毎月一回一日發行）第五百六十五號

第四十七年　四月號